

実例③

◆難易度=★★☆☆☆ ◆作業日数=3日間

素人の若者たちが楽しんだ、小屋作りワークショップ体験記!

「僕たちも小屋を作りたいので、一緒に参加してもらっていいですか?」。本書の執筆中、近所に暮らす若者たちが我が家に遊びに来て、ウチの敷地に建つログハウスや工房、ガレージなどを私自身が手作りしたことを知ると、さっそくワークショップで小屋作り体験をしたいという。さすが、若者たちは行動が早い!

プランを聞いてみたら、古民家の庭に放置されたコンクリート基礎を利用して、4畳ほどの小屋を作るらしい。3日くらいで完成して、しかも室内は大人が4人ほど寝られるスペースが欲しいとのこと。そこで提案したのが、大きめのロフトを建物の前面にオーバーハングさせ、その下に茶室のような「くぐり戸」を設ける変則的な小屋だ。これを作るには少々頭をひねる必要があるが、むしろそのほうが若者たちもゲーム感覚で楽しめるだろう。

ワークショップに参加したのは、丸ノコもドライバーも

初めて使うという素人集団。しかし、最初に少しでも安全な使い方を教えるだけで、1時間後にはみんな工具を上手に使いこなしていた。作業のほうも、土台の設置、壁の立ち上げ、屋根の下地まで順調に進み、懸案だったロフトやくぐり戸もバッチリ収まった。合板を持ち上げるなどの力仕事は男性陣が有利だったが、丸ノコで材料を真っ直ぐカットしたり、ビスをていねいに打つ場面では女性のほうが活躍していたのが印象的だった……。

結局、当初の予定通りに小屋がほぼ完成。参加した若者たちも非常に満足そうで、これをきっかけに日本各地で小屋作りのワークショップを始めた若者もいる。案ずるより産むが易し。やっぱり、小屋作りは誰でも気軽に体験できるし、人生の楽しみや可能性を広げてくれる最高のイベントでもあるのだ。こんなに楽しいことを積極的に企画した若者たちに拍手!



敷地の都合で、建物の手前側にロフトをオーバーハングさせた変則的な小屋。右下の奥に見えるのが「くぐり戸」で、室内に入るときは茶室と同じように中腰になる必要がある。普通の家なら不便でしょうがないが、小屋だからこそ許される遊び心満載の建物といえるだろう。壁の仕上げ材も「焼き杉」にして遊んでみた



とりあえず、丸ノコとインパクトドライバーさえ安全に扱えるようになれば、小屋を作ることができる。今回、素人の若者たちが、見事にそれを証明してくれた



室内は1階が4畳、ロフトは2畳と意外と広々としている。ロフト下は収納スペースのつもりだったが、パソコン室として利用するらしい。若者の発想は斬新だ!

【小屋作りアルバム◆1st-day】……土台の設置と壁の立ち上げ



土台は2×4の防腐材をダブルにして、根太を455mm間隔に入れた。小屋作りの基本的な方法だが、間取りは少々変則的



土台に合板を張ってプラットフォームとし、その上で壁枠を作っていく。これも2×4材を基本通りに組んでいくだけで



大人数なので、壁の立ち上げは楽勝。ただし、ロフトの構造が複雑なので、壁用合板は後張りにした



四面の壁枠を立ち上げた状態。手前右側は半畳ほどの土間となり、この奥に「くぐり戸」が付くことになる。この時点では、まだ壁枠がグラグラしている



ロフト前面の小壁を立ち上げる。片側がオーバーハングになるが、両サイドの壁と一体化したこと、すべての壁がガッチリ収まった。このように容易に強度を出せるのがツーバイ構法の利点だ



丸ノコのカットでは、女子のていねいな仕事が光った。近年、リフォームの現場でも女性の職人さんが活躍していると聞か、納得した次第

男子は力仕事で活躍。壁下地の構造用合板も半分ほど張って、初日は終了。「なんだ、意外と簡単じゃん！」



【小屋作りアルバム◆2nd day】……屋根と戸を仕上げる

2日目は壁作りの続きから屋根の仕上げ、くぐり戸の取り付けまでを同時進行!



妻壁の下地はちょっと悩むが、現物の寸法を測って材料を切り出せば失敗がない。こうした場所をあわず作業したい



垂木を455mmピッチで入れ、面戸板や鼻隠しなどを取り付ける。だんだん小屋っぽくなってきたぞ!



細かな仕上げはまだだが、一応、小屋の形はできてきた。念のため、土台と基礎はアンカープラグで固定している



屋根は下地用の12mm構造用合板を垂木に留め、アスファルトルーフィング(2重張り)、仕上げ材の順で張っていく。仕上げ材は、ここでも安くて施工しやすいオランダ波板を使用した

初めてのセルフビルド体験で、作業中の若者たちの顔は活き活きとしていた



くぐり戸は1×4材を組み合わせて作製。ヒンジで留めて、流木の取っ手を付けてみた

合板を無駄なく使うプランにすると、ロフトの空間は大人がギリギリ座れるほどの高さになる



【小屋作りアルバム◆3rd-day】……焼き杉を作って壁を仕上げる!



壁の仕上げ材はスギの野地板。これを表面だけ焼き焦がして「焼き杉」にする



野地板を3枚組み合わせると三角柱を作り、濡らしたロープなどで結わえて仮止める



三角柱の下端に軽く丸めた新聞紙を突っ込み、ライターで着火する。安全のため、消火器を用意しておくこと安心!

安全な場所に三角柱を立てる。脚立などに立てかけるのもよい。すると、三角柱の「煙突効果」によって、20～30秒ほどで上部から炎が勢いよく立ち始める。炎が弱いときは、三角柱を傾けたり、板と板との間に鎌の刃先などを差し込んで新鮮な空気を送るとよい。ただし、最初から空気を送り過ぎると、新聞紙だけが先に燃えてしまって板に着火しにくくなる



1〜2分燃やしたら、三角柱を静かに倒すと煙突効果が解消されて自然に消化する



三角柱を解体し、余熱で板が炭化しないように水をかけておく。この後、焼き面同士を重ね合わせ、上にブロックなどの重しを置いた状態にして板が反るのを防ぐ

※「焼き杉」は主に西日本での日本建築で使われてきた壁材で、杉板の表面を炭化させることによって腐食や虫食いなどを防ぐ効果がある。耐候性や耐火性にも優れ、50年以上の風雨に耐えるともいわれている



焼き杉は下見張りで仕上げた(45ページ参照)。焼きムラがある場合は、その部分に黒色の塗料をスプレーしてやればよい。これで小屋の完成だ!

